

1994 年夏休み宿題

こうして私はだまされた

修士2年 國枝 武和

「円高、円高」と騒がれるようになって久しいが、今春から夏にかけての円高の急激な進行には目を見張る物がある。この円高に釣られるように、不況下ふたたび海外旅行が人気を集めている。未知なる国への憧れ、異文化との接触、貴重な体験ができるし、世界観も広がる。しかしながら、いいことばかりで旅行が終わるわけではない。成田でつまづいた倉田さんの例を引くまでもなく、海外旅行には多くのトラブルがつきまとうのが常である。この文章を読んで頂いた方の他山の石に、あるいは単に話の種として、私の遭遇した数少ない(?)トラブルの内いくつかを書いてみたい。

I 中国編

1991 年の3月、湾岸戦争はようやく収まりかけていたものの、欧米では未だに湾岸戦争に絡んだテロの不安が除き切れていなかった。そんなとき、私は初めて一人で海外旅行にでかけることにした。行き先は中国南部に決めた。雲南省の秘境っぽい雰囲気にはかかれたし、なんといっても天安門事件のために中国は当時国際的に孤立状態にあり湾岸戦争と無縁であったことが決め手であった。日本人が中国に入るためにはビザが必要なのだが、日本でこれを取得するにはあらかじめ全旅程を決定し中国国営旅行社に知らせる義務がある。当時の私はそんな面倒なことをする気はさらさらなかったし、旅程を束縛されることがいやだったので、いったん香港に飛び、香港でビザを取得してから中国にはいることにした。この方法だと、日本人でも自由旅行のビザがとれるのである。さっそく、東京ー香港の格安航空券を購入し、旅行の準備を整える。成田を夕方飛び立ち、翌日には、香港ー中国国境(深せん)に到着した。ビザは 30 分ほどで取ることができ、胸を張って中国国内に入る。まず、駅の両替所で中国の元を手に入れる。列車とバスを乗り継いで最初の宿泊地広州にたどり着いた頃には、すでに空は赤く町が闇に沈むのも時間の問題であった。広州駅前には「流花賓館」と大書された見るからに立派なホテルが建っていた。外国人観光客向けの最高級ホテルの一つである。この手のホテル内には、レストランや両替所、郵便局までそろっていて至極便利になっている。私は、この流花賓館の隣にあった紅棉飯店という古びたホテルに宿を取った。

翌朝、目が覚めるとさっそく朝食を食べに外にでることにした。店を物色しているうちに、ふと不

安になって財布の中を覗くと案の定元紙幣はほとんど残っていない。さっそく駅前に戻り、隣の流花賓館の両替所を使わせてもらう。従業員が追い出すのであろうかホテルの中には人があまりいず、外の雑踏とは無縁である。さすがは高級ホテル、私の泊まったホテルとは大違いだ。さて、無事両替が終わり外にでようとするやうに玄関の前に大勢の人がたむろしているのが見えた。駅前広場とは違ってアラブ人がやけに多い。私はできるだけ平然を装って外へでた。さっそくアラブ人が話しかけてくる。

“Change Money, F.E.C.”

ブラックマーケットだ。中国の貨幣には種類が二つある。1つは人民幣(レンミンビ)で、中国の一般人民が使うのがこれだ。もうひとつは外貨兌換券といって、円やドルなどの外貨と交換できるもので外国人旅行者や政府高官が持っている物だ。海外から輸入された贅沢品などはこの外貨兌換券でなければ買うことができない。このため、外貨兌換券1元は人民幣1元よりも価値があるものとされている。ブラックマーケットはこの2種の貨幣の交換を行う非合法市場であり、後で分かったことだが当時、外貨兌換券100元は人民幣約130元と交換できるというのが相場であった。F.E.C.というのは Foreign Exchange Certificate の略で外貨兌換券のことだ。つまり、アラブのにいちやんの言いたいことを意識すれば「余ってる外貨兌換券ない？高く買うよ。」ということになる。すこしでも、旅費が浮くなら私は彼らと交渉することにした。

“How much Ren-min-bi for F.E.C. 100yuan?”

「110元だ」集まってきたアラブ人青年の中でリーダーらしい男(かりにアブドゥルとしよう)が答えた。歳は30才くらいだろうか。

こういう交渉は、お互いふっかけ合いで始まる。「180元にならないかな？」

「とんでもない。120元でどうだい」アブドゥルも負けてはいない。

これはまだいけそうだと続ける。「170元でどうだい？」

「130元。」アブドゥルの答えも段々あがってくる。

ここらで決めに入ることにして一気に20元下げて勝負にでる。「150元、これがラストだ」

「135元。」アブドゥルの上げ幅が下がった。これくらいが相場ということなのだろうか。

私はもう一度繰り返した。「150元、これがラストだ」

アブドゥルも繰り返した。「135元。」

これ以上あげる気はないらしい。

基本的に交渉は最初から相場を知っていて始めるのが得策である。他に ブラックマーケット屋は沢山いるのだから、焦ってアブドゥルと取引する必要はない。私は内心相場を知ったことに満足しつつ、表面上は肩をすくめて残念そうな顔をして立ち去ろうとした。すると、アブドゥルはあわてて私の腕をつかんで引き戻す。“150yuan, Ok.”なんと150元でいいと言い出した。周りのアラブ青年達がアブドゥルに抗議しているのをみると150元というのは結構な高値なのだろう。もっとも相場はもっと高かったのかもしれない。ちょっと失敗したかなと思ったが、こちらから150元と言ってしまった以上、取引しないわけには行かない。これは紳士協定である。私は懷から外貨兌換券100元1枚を取り出し、アブドゥルに渡した。アブドゥルは隣の青年に100元を

渡し、自分のポケットを探り始めた。私は 100 元を持って逃げられたりしないように、アブドゥルと青年の動きに目を光らせる。青年は渡された外貨兌換券 100 元を丁寧に3つ折りにし、手のひらに収まる大きさにした。アブドゥルはポケットから取り出した人民幣を数え始めた。私は一枚たりともだまされないよう青年からアブドゥルの指先に注意を移し注意深く観察する。私は目を疑った。アブドゥルの紙幣の数え方はこうなのだ。

絵

こんな奴等と取引してもろくなことはない。アブドゥルを無視して、隣の青年が持っている外貨兌換券 100 元を奪い返し、彼らに背を向けてその場を去った。何やら後ろで騒ぎ声が聞こえるが、こちらの知ったことではない。ブラックマーケットに手を出すときにはあらゆることに注意しておく必要があるという教訓が得られたわけだ。私は、たまたまインチキを見破り 100 元札をこの右手に奪い返すことができた。我が愛しの 100 元札を広げてしみじみ眺める。...少し色調が変わったようだ。よく見ると、私の手の中にあったのは、外貨兌換券 100 元によく似た新デザインの人民幣 10 元であった。

アブドゥルに意識を集中している間に隣の青年が入れ替えた物であろう。私は 50 元の利益を得ようとして、あっさり 90 元を失い更に外貨兌換券を人民幣にしてしまったことになる。(当時1元＝約25円、高級ホテル一泊 75 元であった)何のために安いホテルに泊まったのかわからなくなってしまった。

後から考えれば、150 元という高値で Ok した時に怪しいと思うべきであった。アブドゥルが外貨兌換券を隣の青年に渡したこと、青年が外貨兌換券を折り畳んで小さくしたこと、そして、アブドゥルがあからさまにインチキな数え方をしたこと、すべて仕組まれたとおりの演技だったのではないだろうか。上には上がいるものだ。「それで生計を立てているプロフェッショナルを甘く見ないこと」これこそがこの事件で得られた真の教訓である。

その後、私は広西壮(チワン)族自治区州都南寧を経て、列車で水墨画の街 桂林に入った。桂林は完全に観光地化しており、住んでいる人々も観光ずれしており手に負えない。桂林駅から市街にでると、さっそく日本語を話す中国人の客引きがよってきた。「ホテル、どこ泊まるの？」放浪旅行をしている私は、ホテルに予約など入れていない。その場で適当に見繕って転がり込むだけである。「そんなもん、決めてないけど。」私は答えてやった。すると、その客引き(後で黄と名乗った)が言うには「いいホテルがありますよ」。私も相手にしなければいい

ものを律儀に答えた。「いいホテルなんか要らない。俺が探しているのは安いホテルだ。」黄は嬉しそうな顔をしていった「安いホテルもあります。シャワー付きシングル泊 37 元」確かにシングルでその値段ならまあ安いほうだ。結局、彼に紹介してもらったそのホテルに泊まることにした。もっとも、部屋についているシャワーからは冷水しかでなかったが。その後、彼に街を案内してもらい、一緒に食事をした。ここで、客引きを利用することのメリットとデメリットをはっきりしておこうと思う。まず、メリットは

1. 重い荷物を持ってホテルを探し回る手間が省ける。
2. うまく行けば、街のいろいろな情報を聞き出せる。
3. 数多くの観光客を相手にしているので、下手な旅行社より観光情報に詳しい。

一方、デメリットは

1. どんな場合でも常にホテル料金に客引きのマージンが含まれる。
2. 客引きに自分の泊まっているホテルを把握される。
- 2 は、意外に思われるかもしれないが、なにかあると押し掛けてきて面倒なのである。

さて、黄との食事に戻ろう。彼は日本人からの手紙を見せて、桂林で面倒を見てあげた人からの手紙だといって話し始めた。確かに文章の内容は桂林での生活と感謝の言葉で終わっており、字体から判断するに日本人が書いたとしか思えない。彼は続けて言う。「この近くに人民解放軍の射撃場がありましてね。一般の人も射撃を楽しむことができます。僕たちも週末よく行くんですよ。日本では銃をもてないそうですね。以前面倒を見たその日本人が一番喜んだのはこの射撃でしたけど、あなたもやってみたいですか？」当たり前のことだが、それまで私は銃を持ったことも撃ったこともなかった。やったことのない体験への憧れとともに帰国したらできないんだと思うと、ここで射撃をしないと後で後悔するような気がした。「是非、やってみたいですね。」私は答えた。「じゃあ、明日さっそく行きましょう。明朝ホテルまで迎えに行きます。」黄は言った。

明朝、約束通り黄はやってきた。空は曇っており、更に桂林は水墨画の街らしく霧が立ちこめていた。彼はバイクにまたがり、エンジンをかけた。どうやらバイクで行くらしい。彼のバイクは驚くべきことに日本製であった。中国において、日本製品は最高級贅沢品である。バイクにしたって例外ではあるまい。バイクにまたがっているのはどうみても 30 前後のぱっとしない男である。そんなに稼いでいるのであろうか？私は後部座席に座り、彼の体に掴まった。濃い霧の中、バイクはスピードを上げていく。「ここで事故ったら、こいつと一緒に死ぬことになるのかよ。やりきれないな。」などと思いつつ、振り落とされないようにしっかりと掴まる。10 分ぐらいした頃、大きな門をくぐり射撃場の敷地内に入った。入口に人民解放軍と書いてある。建物の中には、兵士とおぼしき野郎が 20 人ほどいた。

黄の案内で、射撃室にはいる。部屋は池に面しており、銃を構えて池の鴨を撃つようになっている。轟音で耳をやられないようヘッドフォンを装着する。解放軍の兵士がアタッシュケースのような物を持ち、脇に来た。彼はそのケースの中から拳銃を取り出して弾を込め、私に渡す。思ったより重量感がある。池に鴨が放たれた。準備万端である。私は、鴨に照準を合わせなが

ら、ゆっくりと引き金を引き始める。なかなか弾がでない。時間が止まったような感じがする。ダーン！人差し指にかなりの衝撃を受け、腕は上に跳ね上がった。鴨はまだ生きていた。弾はあさっての方向に飛んでいったらしい。その後、何度か試みるがなかなか当たらない。後ろで見物していた兵士達が笑っている。黄が言った。「隣室に機関銃があるから、それでやってみましょう。」さっそく、隣の部屋に移り、機関銃の準備をしてもらった。引き金を引く、ダダダダン。更に強烈な衝撃である。でも鴨は相変わらず悠々と泳いでいる。全部で 2-30 発しか撃っていないが、もう指が痛くてたまらない。一応銃を撃ったことに満足し、もうおしまいにすることにした。

黄と一緒に軍のカウンターに向かう。すっかり忘れていたが、料金の精算である。カウンターの男が紙にゆっくりと料金を書いていく。「1」いくら中国の物価が安くても1円でことはないよな。「17」17 元か安い物だ。「170」？170 元？結構高いな。急に不安におそわれた。「1700」！1700 元！！信じられない。こいつらはその金額の価値が分かっているのか。100 元を越えることすら滅多にない中国で1700 元！？まさか！？カウンターの男は書き続ける。「1700元」よっ良かった。17000 元じゃなくて。でも、1700 元とはなんとという高さだろう。日本円に換算したって、約4万円である。黄を見るとにやにや笑っている。黄と軍はつるんでいて、不法に高い料金を請求して利益を上げているようだった。黄が日本製のバイクを買えた理由がよくわかった。だが、ここで黙って引き下がるわけには行かない。とにかく抗議する。まず、1700 元の内訳を言うように求めた。

彼らはペラペラの紙を渡した。そこに書いている数値はむちゃくちゃであった。彼らのデータでは私は拳銃を 100 発、短銃を 200 発、機関銃を 700 発、撃ったことになっていた。私はこんなに売ったはずはないし、大体 1000 発撃つには 1 発 30 秒としても8時間以上かかる。しかも、撃った弾の数が 100 発単位で端数がない。さっそく反論を試みたが、軍のカウンターはおまへはこれだけ撃ったんだ、それだけだ。と、まるで取り合ってくれない。これではちがあかないと、周りを見渡すと、10 数名の兵士が無関心を装って、ぶらぶらしている。しかし、ときどき横目で私を見ることからこちらに注意を向けていることは明らかである。ここにいる奴等は誰も信用できないことが分かり、黄に抗議しながら頭の中で必死に（本当に必死である）打開策を模索する。

仮にこの射撃場から走って逃げだせたとして勝算はあるだろうか。まず、黄のバイクで連れてこられたからこのあたりの地理は全く分からない。周囲の人の協力を得てかくまってもらったとしても、一日も早く桂林をでなければならぬが、列車や飛行機のチケット取りは中国では1日仕事であり、逃げおおせるはずがない。それに、黄は私の泊まっているホテルを知っているから、ホテルにおいてある荷物は失うことになる。連絡すべき日本領事館の電話番号などはその荷物の中に入っている。大体、この射撃場を逃げ出すのは至難の業である。周りは銃を携えた兵士がうろうろしている。最悪の場合、撃たれる可能性がある。仮に撃たれて死亡したとしても、日本には真実は伝えられないだろう。全く知らされないか、知らされたとしても無茶苦茶な内容だろう。たとえば、人民解放軍の訓練中に興味本位で日本人が侵入し、流れ弾に当たっ

て死亡したと言われれば、そう信じるしかないであろう。その時は本当にここまで考えたのである。

頭がオーバーヒートするまで考えて、たどり着いた結論は素直に 1700 元払うということであった。トラベラーズチェック、カードからのキャッシングを使って、1700 元を用意し渡した。これまでの海外旅行の中で、この時ほど恐ろしく、かつ悔しい思いをしたことはなかった。中国で最も恐れるべきは国営機関であるという結論にいたったのもこの時である。国家権力を要しながらモラルがない。まあ、これは日本でもそうかもしれないが。後で聞いた話で真偽のほどは分からないが、中国全土の国営企業の民営化の流れの中で、人民解放軍も独立採算制に移行したとのことである。その資金集めの一環として、観光客から金を巻き上げるという方法が採られているようである。アメリカで射撃を行った人の話を聞いても中国での料金は 5-10 倍高いらしい。今夏の日本の新聞に、中国各地の人民解放軍射撃場で観光客に射撃をやらせているとの記事が載っていた。なんでも、20万円払えばバズーカ砲も撃たせてもらえるようである。私のような失敗を繰り返さないで欲しいと思うのだが、杞憂だろうか。

この後、更に雲南省奥地に入りタイ国境まで行くのであるが、上のような経験をしたおかげか特に深刻なトラブルには巻き込まれることはなかった。まあ、一番危険なのは都会や観光地などの小利口で志の低い人間であり、奥地に行けば行くほど逆に安全であるともいえる。

II モロッコ編

同年 8 月下旬、1 月半かけてギリシア、イタリア、オーストリア、ハンガリー、チェコスロバキア、ドイツ、フランス、スペインと周り、いい加減ヨーロッパ文化に飽きた頃、イベリア半島南端の港町アルヘシラスにたどり着いた。強烈な日差しで知られるスペインの中でもここは特にすごい。港から南を見渡すと、広い海が横たわり、その向こうにはアフリカ大陸が潜んでいる。ここから船でたった 2 時間で、対岸のモロッコの港町タンジェに着く。

モロッコの名物に「自称ガイド」というのがある。これはどういう物かというと、例えばあなたが街を観光して歩いているとする。後ろから前からあるいは横から見知らぬモロッコ人が近寄ってきて、あそこが有名ななんちゃら寺院だとか勝手に説明を始め、ガイド料を請求するのだ。かりに、あなたが自分で地図を見て自力でその寺院にたどり着いていようと、彼らは公然と結構な額のガイド料を要求する。たとえ、話の内容が全くない「私は日本人をよく知っている。ブルースリーはカッコいいね。」というようなことしか話さなくてもガイド料は請求される。(彼らはなぜかブルースリーはよく知っている。ジャッキーチェンはモロッコでは全くの無名であった。もっともいずれも日本人ではないが。)さらには、ろくすっぽ調べもせずどこそこ行きのバスは 12 時発だなどと嘘を言ってガイド料を要求する。まあ、なんというか、そういうお国柄なのだ。

何はともあれ、私は 2 時間の船旅を終え、異次元の国モロッコに足を踏み入れた。港の建物をでると、敷地内に鉄道の駅が見える。タンジェ港駅である。タンジェには 2 つの駅がある。一つはこの港駅で、もう一つは町中にあるタンジェ駅だ。私はマラケシュに行きたかったので、港駅の駅員にマラケシュ行きの列車が何時にどちらの駅からでるのか訊いてみた。しかし、駅員は肩をすくめてフランス語で応えた。モロッコは旧フランス植民地であったため、ほとんどのモロッコ人がフランス語を話すことができる。しかし、私は日本で普通に育ったので残念ながらフランス語はアンドゥトロアとウイとノン位しか解さない。私が困惑していると、隣にバックパックを背負ったツーリストらしいモロッコ人が来て通訳をしてくれた。彼の話では、大体 1 時間後にマラケシュ行きの列車が町中のタンジェ駅からでるということであった。彼はカイと名乗り、フランスソルボンヌ大学に留学中で帰省してきたところだと言った。私も自分の名を名乗り、日本からの旅行者であることを告げた。一通り自己紹介が終わった後、彼はおもむろに口を開き、こう言った。「外国人がこの国を旅行するにはちょっとこつが要る。

'I advise you "Don't trust anybody ".」

“DON'T TRUST ANYBODY ”

これこそ金言である。もし私の目の前にモロッコに旅行に行こうとしている人がいれば、私も躊躇なくその人にアドバイスするだろう。“Don't trust anybody but yourself ” と。

僕らは港の建物に戻り、列車が来るまでの 1 時間をクーラーのきいたところで時間を過ごすことにした。ドリンクコーナーで甘いミントティーを飲みながら彼にいろんな話を聞いておく。とりあえず今、信用できそうなのは彼一人なのだ。一通り話が終わった頃、彼がふっと顔を上げしゃ

べり始めた。「いい考えがある。君はマラケシュに行った後更に砂漠の奥に入ってザゴラまで行くと言ったね。マラケシュは危ないから、こうした方がいい。まず、フェズに行くんだ。フェズは宗教の都で安全だ。そこから先にザゴラに行く。そして最後にマラケシュに行くんだ。もし、最初にマラケシュに行くと君はザゴラ行きの情報をマラケシュで集めることになる。マラケシュの人たちは観光ずれしてるから、君がザゴラに行くと聞いたら目を付けるだろう。なにしろ砂漠の町ザゴラに行くということは、かなりの準備資金を持っているということになるからね。そうすると、君の命はザゴラでサハラを見るまで保たない可能性が高い。その点、フェズなら敬虔な人が多いから安心だし、ザゴラからマラケシュに着けば資金を大半使い込んだ後だと思われて狙われる心配も少ない。フェズ行きはもうすぐ駅から発車する。急ごう。」地名の説明をしておこう。マラケシュはモロッコ観光のメッカでモロッコを旅行する人が必ず訪れると言われる都市である。ザゴラは、マラケシュの南を走るカスバ街道の更に南にある町で、サハラ砂漠西端に当たり、砂漠の町と言われる。町はその名のとおりの荒漠とした砂漠に囲まれている。もう一つフェズは日本で言えば京都に当たる。観光の都マラケシュと対比して宗教の都フェズと呼ばれ、毎朝6時に「アッラーは偉大なり」の大音響が響きわたる奇異な町である。

僕は、ついでにフェズも見ておきたいという気もあり、とりあえずフェズに行くことにした。カイは何やら友達を見つけたらしく、僕に駅までの道を教えて去っていった。僕は一人で建物を出、広大な港の敷地内を出口をめざして歩き始めた。まだ、正午を少し回ったばかりで日差しがえらくきつい。強烈な太陽光線にめげながら少し歩くと、今度はいかめつらした 40-50 くらいのおやじが「港湾観光局の者だが」といって近づいてきた。疑うべきか信じるべきか？彼は話し続ける。「最近、日本人観光客のトラブルが増えている。自分は今日はフリーだから君と一緒に町を回ってあげよう。」かれこれ言ううちに、港の出口にたどり着いた。彼は門のところにたっているガードマンに手を振って挨拶し、こう言った。「ほらね、自分は観光局に勤めているから港内に入れるけれども、普通の人のはあのガードマンに追い出されてしまうんだ。」確かに港の中と外では人の密度が全然違い、外は埃が舞い見るからに怪しい。この人の言うことは正しいのかもしれない。彼は話を続ける「町に出たらすぐのところに荷物預かり所があるからそこに荷物を預けて一緒に町の観光に行こう。」しかし、私はタンジェを観光する気はないし、フェズ行きの列車がもうすぐ発車するからあまり時間がないのだ。そう彼に伝えてみた。すると彼は駅の方を指さし首を横に振って答えた。「フェズ行きの列車？駅を見てごらん。閉まっているだろう。暑いモロッコでは列車は夕方からしか動かないんだよ。誰かにだまされたんだね。この国じゃ人の言うことを信じちゃいけないよ。」こうすると、いったい何が本当に誰が嘘をついているのか分からなくなってくる。駅の方を見てみるが、遠すぎて閉まっているのかどうかよく分からない。ただ、昼には列車がないと言うわりには、多くの人が集まっていた。質問してみる。「駅が閉まってるって？じゃああの大勢の人たちは何をしてるのさ？」彼は少し動揺したように見えた。「列車が来るのを待ってるんだろう」彼は答えた。夕方からしか動き出さない列車を真っ昼間から待つものだろうか？これは怪しい。そう判断した私はもしかしたらこの人は正しくてモロッコの人には長い間列車を待つのもかもしれないと言う一抹の不安を感じながら、彼を無視して駅に向かい歩

速めた。彼はあわてて追ってきて今度はいやらしい笑いを浮かべながら小さな声でしゃべりかけてきた。「ちょっと待ちなよ。この町は観光だけじゃない。安くていいのが手に入る。どうだい？」私がきょとんとして「なんのこと？」と訊ねると、彼はマルボロの入った私の胸ポケットをポンとたたき、顔を近づけてささやいた。「スモークですよ。極上のハッシッシ。」

私は駅に向かって歩き続ける。フェズ行きの列車はPM2:00 定刻通りにタンジェ駅を出発した。

この後、フェズ、マラケシュそしてザゴラと一通りの旅を終え、おかげさまで五体そろって再び日本に戻ってくることができた。この道中、勿論ノートラブルで済んだ訳ではないが、それらの話はここでは割愛する。ただ、モロッコの異質な雰囲気は少しは伝えられたのではないかと思う。

アラブの中でも最もヨーロッパナイズされていると言われるモロッコからしてこの異質さである。一体、アラブ世界というものはどうなっているのだろうか？私には理解できそうにない。ヨーロッパ文化が全世界を席卷している今日、アラブ文化はヨーロッパ文化に対抗できる勢力と内容を保った唯一の文化かもしれません。アラブを理解できないと言うことは、私が既にヨーロッパの影響を強く受けてしまったことの裏返しではなからうか？かつては日本文化もヨーロッパから見れば相当異質な文化であったに違いない。そしてまた、江戸末期の日本人にとってもヨーロッパ文化は受け容れがたい文化であったろう。別に国粋主義を振り回すつもりはないのだが、各民族が独自の文化を保ち続けることが大切なのではないだろうか。アラブ人はアラブの、日本人は日本の文化を築くべきだと思う。具体像はまだ浮かばないのだが、自然科学も当然その文化を反映したものとなるであろう。

おしまい

(文中、記憶に頼って記述していることが多く、正確でない可能性があります、ご容赦下さい。)